
稚児行列

七條朋次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

稚児行列

【コード】

N9015Z

【作者名】

七條朋次郎

【あらすじ】

実団体をモデルにした場面もありますがこの話はフィクションです。

前編

ここは大阪市内L区。ここには古い名刹L宗の総本山と言われている寺がある。

毎年花の季節春の終わりごろに300年連綿と続いている祭りがあ
る。大阪無形文化財にも指定されている菩薩参り、お練り、稚児行
列がある。その間ずっと荘厳な声明が続く。老若男女かつ善男善女
がごぞつてお参りし、屋台を冷やかし楽しむ祭りである。

境内はいつもは閑散としているがこの日だけは駐車場は警備員を
10名ほど増やし交通整理をする。人通りが絶えなく、準備にかけ
まわる下っ端の若い坊主たちも心なしか浮ついているように見える。

本日、谷待美耶子たにまぢみやこは初めての子供を稚児たににさせるべく義母の谷待
今朝子まちけさこに連れられてお参りした。

まずは寺の事務所で稚児になるべく予約していた旨を伝えると受
付の坊主に名簿を照会され、確認後に参加料金、貸衣装代をいくば
くか支払い、稚児の控え所に案内された。

控えの間はすでに30人ほどのまだ歩けない1歳ごろから8、9
歳ごろの幼児、少年少女たちが所せましとかけまわっている。普段
は何らかの回向や法要が終わった後に食事をするための広い場所だ
が今日ばかりは子供達の歓声に満ちてにぎやかだ。そして狭く感じ
る。

美耶子みやこも祭りの雰囲気、境内の中に気の早い屋台がもう営業して
その中に昔なじんだスーパールボールすくいや金魚すくいの暖簾を見
かけて幼いころを懐かしんでいたが、稚児行列の楽屋もしくは支度
部屋というべき場所に一步入ると気がひきしまった。その部屋は本
堂に廊下を隔てて続いている。部屋にいても線香の香りと坊主達の
衣ずれのさらさらいう音、声明の練習か鐘や太鼓の音がよく聞こえ
る。

気分が高揚してきたが、もつとはしゃいでいたのは美耶子の長男、2歳になったばかりの啓太郎だろう。いつもは気難しい義母も啓太郎には甘く、この日も「ええなあ、啓太郎や。おとなしゅうしなさいや、今日のお稚児さんの行列が終わったらばあばはなんでもこうたるさかい、ええこにしときなはれやあ」、とやさしく言い聞かせるのであった。

もとより啓太郎には稚児とは何かも知らない。ただ人が大勢いるのと、いつも静かな家とは雰囲気がるで違うので目を丸くしてはしゃいでいた。

ベビーカーからおろして支度部屋の畳にあがると啓太郎は前も見ずにそのまま床の間に突進して部屋のすみにおいてあったいくつかのぬいぐるみに喜んでさわった。すでに同じ年頃の幼児もいたが見知った顔はなくそれでもまわりのいくつかの家族に丁寧に会釈してはしゃぐ啓太郎の手をやさしくひいて座らせ、部屋の片隅にもつてきた荷物を置いた。

美耶子はこの日だけは義母に言われたとおり着物を着ていたが普段は着慣れていない分、すでに息苦しさを感じている。義母は少々季節には早いが襟もとに家紋、菖蒲の花を散らした紹の着物を難なく着こなし、さつと裾をさばいて正座する。それからハンカチで少し脂の浮いた顔を押えて油脂分をとり、自分の知った顔はないかとさりげなく目を配る。

美耶子も四季の花々がたくさん散りばめられた季節を問わない、それでも京染めの訪問着を着ていたがすでに汗ばみ、胸元が苦しく息があがりそうだった。この状態で今日1日大丈夫やるか、という心配はあるがそれでも畳の上に座布団はないものの直に座らせてもらうと気分が落ち着いた。

義母の今朝子けさこは季節や作法にやかましい人でしかも今ふうというと非常なアナログな人間だ。着物の着付けぐらいはひととおり美耶子もできるが、それでも義母が着物ベルトやつけあげの簡単な気付で着物が着れる便利道具には強い拒否反応を示すので閉口しつつ、

彼女のいうとおり昔ながらのしごきや腰まくらを使用して古風な着付けをしたのだ。

今の着物ベルトをしていたら柔らかいゴム製なので胸も苦しくならないし、第一使用したとしても、見た目よその人にもわからないではないか、義母の年代でも使用している人は多いとみられるのに、彼女は「ああいうもんは楽らくしたがりかどうかどうらくもんや水商売の人らが使ってもんや。うちらだけでも昔ながらのやり方でせなあかん。美耶子、あんたはちゃんとしいや。

実家もええとこの子や、と思うてあんたとこと、きちんと縁組したんやし、今日の祭りかて、誰が見てはるかかわからへん。あんじょうようしなさいや」

と繰り返す言う。美耶子は内心姑のくりごとの昔が一番良かったという老人めいた愚痴にうんざりしているが今日みたいな日だけは彼女を頼らないと実情がわからない。

今日は稚児行列とはいえ、親戚も何家族かくるというし結婚後2年立ってもまだ面識のない親せきや知り合いを紹介される可能性が高いのだ。

気楽に屋台を冷やかしながら祭りを楽しんだ子供時代を一瞬振り返ってため息をつきそうになったがそこをぐつと我慢した。

美耶子の嫁いだこの谷待家は20代連綿と続いた大阪府史にも書かれている市内P区の屈指の名家である。P区を代表する府会議員を3代続けてだし、うち一人は衆議院で大臣にもなった。元々は庄屋で広大な土地をもっていたがどういうわけか農地改革にも支障なく莫大な土地を高速道路や公的機関に売り出し、またJRのP駅前には貸しビルをいくつも建てて身上良い。この世知辛い世の中、大儲けとはいかないが、堅実で節約を家訓とし、無茶な浪費は代々しなかったし、一番新しい世代である美耶子の夫、丈太郎もそうだ。

一方美耶子は3代続いた医師の家系。祖父も父も母もそして長男である美耶子の兄も医者である。兄は現在1勤務医として国立大学

付属病院の医局にいるがいずれは父の病院の後を継がねばならぬ
いだろう。丈太郎との縁談は美耶子が大阪城にて家元主催のお茶会
に出た折に丈太郎の母、今は美耶子の姑になつてゐる今朝子が見染
めたのだ。

だからとんとん拍子・・に縁談が進んだほうだろう。相手になる
丈太郎は親の言いなりになるたんなるボン（おぼっちゃま）ではな
く、親の意向を酌みつつ自分の主張をうまくいいとおす、新進気鋭
の不動産会社社長だった。

今朝子はその実母ではあるがその旧家の一人娘、もちろん養子を
もらつて早くにあとを継いだが美耶子にとつて義父となる養子は早
くに早世し、母一人子一人の家であつた。だが経済的にはもちろん
支障なくまた政治家を出した家といつので、選挙の時期には人の出
入りも未だ多く今朝子自身にも出馬要請もあつたとはきいてゐる。
出馬こそしなかつたものの今朝子は旧家の跡継ぎとして丈太郎を育
て上げた気丈な女実業家といつた世間的な位置づけもあり、決して
ただの御嬢さんではなかつた。

個人的な身上調査は内緒で美耶子も丈太郎のほうも、お互いにし
たにちがいないが双方の家柄にも傷はなく、双方とも財産家とあれ
ば物言いもあるはずがない。加えて美耶子は小さいころから医師に
なるべく育てられたが、同時にどこへ嫁にやつてもやつていけるよ
うに、茶道も華道も家計をあずかる亡き祖母に厳しく仕込まれた。
美耶子は両親の医師になつてほしいという希望には残念ながら添え
ず、小さい子供が好きという理由で保育士になつた。学力面の問題
もあつたが、病院の雰囲気はどうにも好きになれなかつたのだ。稼
業とはいへ、多くの患者さんたちと話をして身体にさわり説明し、
そして薬を出してやる。やりがいがある職業とはわかつてゐるが、
生理的に自分にあわないと思つてゐた。対人関係が苦手だつたのだ。
基本的におとなしく家でじつと絵本を読むのが好きな子供であつ
たから両親も強くは言わなかつた。ただ小さい子供のために絵本を
読み、お絵かきを一緒にして壁にかざるといふことは大好きでそれ

で保育士の資格をとった。

短大卒業後は自分の病院で院内保母をした。病院で働く看護師さんたちの小さな子どもたちをあずかる仕事である。24時間体制ではあるが預かる児童はいつも多くて5名前後だし、交代でもできるし気楽な職場だった。

そういう自分がまさか大阪でも名のしれた旧家に望まれて嫁ぐとは思わず、今の置かれている立場も未婚の気楽な時代を思えばなんと気の使うことか。特にいわゆるシュウトメとの同居がこんなに気苦労するとは思わなかった。

見合いの場でも穏やかなやさしそうなお義母という雰囲気です。結婚するまで丈太郎と3人で何回も会食をした。その時もこれなら一緒に暮らしていけるといふ感触もあったのに。

美耶子は人知れずため息をつく。

今朝子は悪い人ではないが、何にでも自分がかかわらないとご機嫌斜めになる人だったのだ。結婚式に着る花嫁花婿の衣装から食事コースまで全部今朝子にお伺いをたてないとむくれてしまうということを知りたくべきだったのだ。幸い丈太郎は母親の気質を受け付かず「ああいう人はうわべだけちゃんとお面が保てるようにしてやればあとは何しても黙っているから、大丈夫、ほうっておけよ」という人だったので助かったのだ。

ただこういう誰に会うかわからないような寺の総本山での行事は今朝子を頼らないといけない。ちょこまかと動きたがる幼子をなだめて化粧の順番待ちをしながらもう一度ため息をつく。

中編

稚児行列に参加するまでにまず化粧をしないといけない。化粧の列は3つあるがどれも小さい子供が対象とあつてなかなか前にはすすまない。

まずおしろいで顔全体を真っ白にし、眉つぶしで眉をかくし、お公家さんのような麻呂眉にするために丸い黒いハンコのようなものを押す。鼻は鼻筋よく見せるために紅をうすくはいでそれを指でのばしてやる。真っ赤な口紅を小さな筆でちよんちよんとのせておちよぼ口のように見せる。たったそれだけのことなのに、すごく時間がかかるのだ。

やっと順番がきたと思つたら啓太郎はまず刷毛でおしろいを塗られるのを嫌がり泣いた。それを羽交い絞めにして「もつとかわいくなれるから、もうちょっとじいっとしといてや、」となだめつつ化粧師に「お願いします」と頭を下げる。

啓太郎は羽交い絞めにされてもなお「いやや、いやや」と泣く。とうとう化粧師の斜め後ろで正座して姿勢よくカメラを構えて写そうとしていた今朝子まで啓太郎の頭を押さえこむ羽目になった。

二人とも大汗をかきながらやつと化粧を終えると今度は着付けだ。これも啓太郎は嫌がり、2人がかりで前と後ろで抑え込んで着付けをしてもらう。暴れるのでしょっぱなから気崩れてぐずぐずだったが、それでも化粧と着付けを終えるとかわいらしいお稚児さんが誕生した。だが仕上げの烏帽子えはしをかぶせる段になると啓太郎はこれまで逆上して烏帽子を放り投げたり、行列のときに持ち歩く造花を持たせても捨ててしまう始末だった。

「まあ、ええ。今は好きなようにさせといたり。行列がはじまるまであと1時間あるやんか。はじまる直前で私が着付けなおすし。烏帽子も直前につけといたらええねん。それまで好きなようにさせときたいな」

とうとう今朝子がさじをなげるまでになった。美耶子が手を緩めると啓太郎は喜んで稚児姿のままでもたもたと部屋の隅に用意されているおもちゃコーナーに遊びに行った。

「まあまあ谷町さん、あれは啓太郎君かいな。えらい大きゆなられて。びつくりしましたわあ」

いきなりしわがれた女の声でした。振り返った今朝子は素っ頓狂な声をあげて

「まあ、得意味さん！お久しゅう。今日はお孫さんと？」

「ええ、伊呂ちゃんと一緒にな。あの子ももう5歳になりました。

お稚児さんの意味もわかっておとなしいもんでっせ。ほれ、あそこで本を読んどります」

窓際に1人稚児姿の少女が絵本を読んでいる。男の子は頭には金色の烏帽子だが、女の子は黄色の鳳凰を揺らした冠になる。穏やかな日差しが冠をきらきらと照らし、窓からは桜が満開な様子がわかり、まるでそこだけが絵の一部を切り取ったような見事な構図になっている。

「ま、あれが伊呂ちゃん。んまー、大きゆうなられて。お顔もかわいらしいしこら将来楽しみですよん」

少女の顔は絵本にかくれてここからはよく見えない。今朝子一流のお世辞なのだが、そういわれて得意味さんと言われた初老の女は喜んだ。それから美耶子に向き直り、にこっとして頭を下げた。

「お嫁さんですね。お話するのは初めてですが私、大元得意味と申します。P町で卸の商売させてもろてます。こちらの今朝子さんは女学校の時の同級生ですねん。ときどきはお茶会に出て今朝子さんとおしゃべりを楽しんでますねんよ。どうぞよろしく願ひします」

美耶子はあわてて頭を下げた。

「こちらこそよろしく願ひします」

得意味はさりげなく美耶子の来ている着物を値踏みしているよう

だった。美耶子もにこやかな表情でさりげなく得意味の服装を見た。得意味は和装ではなく洋服だがレオナルドのドレスを着ている。このブランドは実家の母が大好きでたくさん持っている。美しい花を描いた発色が素晴らしいブランドだ。指輪とイヤリングもお揃いでお寺という場所柄も考えて控えめな感じに仕上げているが一目で金持ちの女ということがわかる。だが太っておられるため体型が余計に崩れてみえて見苦しい感じもある。実家の母の方が似合う。これじゃレオナルドがかわいそうやわ、と美耶子は思ったが意地悪な見方だと気づいてあわてて、でもお人が穏やかで良い人そうな、と思いなおした。

やがて今朝子が得意味にひそつと話しかけた。

「なあ、そやけどこの花見て。稚児に持たせてお練りせんとあかん大切な花やで。せやけど、今年も桜の造花やで。うちらが小さいころのお稚児さんの時は本物の花やったのに、このご時世のせいか、このお寺もけちくそうになったもんや。」

得意味もうなづく。

「そやそや、昔は本物の蓮の花やった時もあつたやんか。今は便利になったといつてもこういうときだけは昔のほうがよかつたなあ」

得意味はいきなり目をあさつての方向に向け、今朝子の注意をひいた。そして小声でしゃべった。

「あこにいてはるのは、Y寺の若いお住持じゅうさんとこの長男や。その隣が次男や。それから抱っこされてるのが去年できた女の子。あの女の子の稚児の着物、見てみい。うちのような借りもんのサテんと違って中のお振袖、ええもん着てはるで」

今朝子はうなづいた。

「ほんまや。こつからみても地模様のあるええ着物。まだ赤ちゃんやし、あれはお誂えやな。大したもんや。長男の墨染の着物も上等もんや。あこの大奥様は着道楽やさかい、そうとうええもん着せてはる。だけどこつから顔はみえんが若奥さんはスーツやな。なんで

こないな日に着物やのうてスーツ着てはるんや。ま、ええけど」

「そうそう。あとであいさつしとかな、あかんな。一緒に行こうや。そんでY寺さんとこは土地もぎょうさん持つてはる。去年結婚させたら三男のお嫁さんの里もええところしいしな、男2人の次には女の子か、は、日の出の勢いやな」

「今朝子さん、あんたとこかて、跡継ぎの男の子、啓太郎くん、いうたかいな。ええやいな。うちとこはまだあの伊呂だけで、次が生まれへんねん。嫁は不妊治療いやいうし、息子も1人産めばええがなつて嫁のいいなりになるし。うち、どっかの神様のとこへ祈祷でもいこかと思いつめてますねん」

「ああ、得意味さんとこは1人息子やさかいな。確かにお商売してはつたら後継ぎは欲しいわな。でもお嫁さんまだ若いやる。ほなら、まだまだこれからやん。きつと大丈夫やで」

話はまだ終わりそうにもない。が、やがて今朝子の顔見知りかやつてきたらしく今朝子が得意味から離れて挨拶をする。そのうちに美耶子も見知っている知り合いや遠縁が次々と挨拶にやってきて、美耶子も今朝子の隣に立つておとなしくにこやかにお辞儀を繰り返した。

すでに見知った顔もあつたし、一度お会いしたことはあつたが、さてどこのどなたやったか忘れてしまった顔もある。もちろん美耶子はどちらさん？と無粋なことは聞かなかつた。

夫の丈太郎にもいざれ選挙の話がくるかもしれへん、とは今朝子からは聞いている。丈太郎自身にはその気は全くないのも美耶子は知っているが、もしものために人の挨拶と礼儀はきつちりと守らんとあかんのはよく知っている。だから今朝子や丈太郎の顔だけはつぶさないようには気をつける。今夜は気疲れて啓太郎とはよう遊ばれへんかもしれん、と思いつつ美耶子は胸をはって、しかし控えめにほほ笑み続けた。

やがて人の波がごつたかえし、声明の声が高くなってきた。本

番が近付いてきたのだ。時刻を見るとあと15分ほど。係の坊主があと5分で本殿左の太鼓橋のたもとまで来るようにと声を張り上げた。美耶子は尿意を感じ今朝子に許可をもらってお手洗いにたった。お手洗いの個室に1人で用を足していると気がゆるんで、ほっとした。腰ひもがずりあがつて少し気崩れしている。着物ベルトやったらこんなにならへんのに、と美耶子はぶつぶつ言って身八つ口から手をいれてお直しをする。ひももできるなら緩めてしまいたかったが、着崩れして見苦しいのはごめんだった。だからそれはさわらずに、飾り帯だけ後ろ手でしめなおした。そして今度はきちんとした姿のまま、便座のふたをしめてから再度便器に腰かけた。ゆっくり1人で座りたかったのだ。美耶子は姑と同居してから、気楽になりたいが、できないときはこうしてトイレの中で下着をおろして用をたさずに便器に座るだけのことが多かった。特に今朝子の友人や知己が家に訪問に來られてなかなか帰らないときは自分の家なのに、自分の部屋も一応はもらっているのに気付かれない程度にトイレで休憩をとってばうつとしていることが多かった。

でもあと少しで本番だ。ここを出たら一番に啓太郎に烏帽子をかぶせて大人しくするようになだめないといけない。

稚児行列は本殿横の太鼓橋からぐるりと本殿を半周し、各お寺のお住持じゅうさんが居並ぶ前を母子で通り、開帳されている本尊を拝む。ただそれだけなのだが、寺の総代はじめ重鎮、かつ主な檀家もそろつので大阪の旧家の社交広場みたいになるのは致し方ない。子供がかわいらしいお稚児さんになる分には全然かまわないが、それに付随してくる付き合いが正直わずらわしいのだ。美耶子はまたため息をついた。

ころ合いを見て、個室を開けて手を洗う。袂たもとにはさんでいた小さなハンカチで手をぬぐっていると、隣の洗面台で垂れてしまった帯を上げなおそうと四苦八苦している女性がいた。見れば年頃は自分

と同じぐらい。だが稚児行列に参加するぐらいだから子供のいる参加者の母親だろう。着物はつるつるの安物に見えたが親近感を覚えて美耶子は「お手伝いしましょうか」と声をかけた。

女性ははつとしたように照れ笑いをして「お願いできますか？」と頭を下げた。やがてどちらともなく話をした。まず子供の年を聞く。あちらも2歳児だった。

「うちの子は烏帽子を嫌がって・・・困りましたよ」

「私のところは女の子なので、嫌がりはずおとなしく着付けもするんですが、冠のゆらゆらが気になるらしくてっぺんについている鳳凰の首をむしってしまいました・・・あわてておわびにあがりましたけれど、これは金具でひっかけているだけやさかい、大丈夫ってその場で直していただきましたの・・・」

まあ！とお互い笑いあい、魔の2歳児っていいいますが本当ですねえつと同意しあう。彼女は大阪弁ではなく綺麗な標準語だった。聞けば関東出身という。

「私は端田と申します。義母と初めて参加したのですが、稚児行列は基本母と子ですよ？でも私の場合は義母がどうしても孫とお練りをしたいと言うのでわたしは回廊で待機するカメラ係です。気楽でいいわ」

「じゃあ、あなたのところは行列は祖母と孫？こういうのもありなのかしらね？」

端田と名乗った女性は美耶子よりもやや年かさのようだったが、姑との仲の悪さをあけすけに出した。

「義母は私を表に出すのが恥ずかしいのよ。実家も大したことない家柄やって見下げるし。頭にくるわ。でも子供は私じゃないということを知らないですしね。着物だけは用意しなさいと言ったのでやっこの思いで用意して、着付けもちゃんと美容師さんにしてもらったけれど・・・気にいらなくて・・・今私、腹がたっているのよ。どうして不愉快な思いをしてまで稚児行列に出ないといけないのかしらね？って」

美耶子は言葉の接ぎ穂に困った。

「えっと、いろいろと大変そうね。でもそろそろ時間ですし太鼓橋まで行きませんか？」

「そうね・・・」

2人が出ようとしたところ、もう一人が個室から出てきて話に加わった。その人は先ほどから美耶子たちの会話を聞いていたのだから。顔には見おぼえがあった。多分お茶会などで会ったことのある人だろう。年も同じぐらいに見える。春らしくピンクのスーツを着ているが一目で上等の仕立てだとわかる。真珠のチヨーカーを来てハンドバッグも真珠のあしらいがある。ヘアはあっさりとした夜会巻きだったが、アクセサリーも本物の真珠だった。こういう場にはすぎない、目立たないけどわかる人には上等な真珠を使っているとわかる上品でよい服装だ。相当な洒落者だろう。けどどこの人が思い出せなかった。その人は美耶子と端田に笑いかけた。

「姑って腹が立つ人種でそれは仕方ないのではない？ うつとこもそうや。だから同居をやめて別居に持ち込んだのはええけど、こういう場所にはきちんと顔を出してくれと夫に言われるのでね。仕方なくやわ。こつちも小さい子がいるので着物でのうて、スーツにしたのに、文句言われっぱなしで閉口しているんや」

手早く手を洗い、ガーゼのハンカチで拭く。ハンドバッグからちらと携帯用あかちゃんのおしりふきのパッケージが見えてこの人も赤ちゃん連れてきはったんやわ、と美耶子は思った。

3人は同じ嫁と言う立場で、かつ口うるさい姑と一緒にいる立場。一瞬で心を許しあつた感じだったが、何せもう時間がない連れだつて控室に戻り各々の子供の方へ散らばった。

そして太鼓橋のもとでお練りをするべく、並んで待った。3人は各々の子連れで再会する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9015z/>

稚児行列

2012年1月10日05時46分発行